

【拠点形成概要及び採択理由】

機 関 名	立命館大学、ロンドン大学		
拠点のプログラム名称	日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点		
中核となる専攻等名	アート・リサーチセンター		
事業推進担当者	(拠点リーダー) 川嶋 將生	教授	外 17名

【拠点形成の目的】

(背景) 21世紀COEにおいて、本拠点は文系と情報系の融合を狙い、京都や日本文化にかかわる無形・有形文化財のデジタルアーカイブの構築とデータベース(DB)を蓄積してきた。すでに100万件以上のデータを持つ国内トップレベルの実績を誇り、マルチメディア型デジタルアーカイブなどの情報技術が人文科学の研究環境や手法を大きく飛躍させ得ること、また、こうしたデジタルアーカイブが情報および人的なポータルを形成し、世界の日本研究機関のハブとなり得ることを確認した。

一方、欧米諸国では人文系研究にデジタル技術を活用する「デジタル・ヒューマニティーズ」と呼ばれる学問分野が確立されてきた。これはまさに本拠点での21世紀COEの活動に整合するものであり、本COEでは21世紀COEの成果を踏まえてさらに大きく展開し体系づけることを企図している。また、海外の日本文化研究は、ネットワーク型の展開を強めており、日本と海外の研究者間で、研究手法や目的に大きな乖離が生じてきている。グローバルな視点を持ち、海外での研究活動のできる日本文化研究者の育成が急務である。

(目的) 育成する研究者像は、国内におけるデジタル・ヒューマニティーズ教育・研究の役割をにない、諸外国の同様の拠点と緊密な連携・協力ができる研究者、デジタルアーカイブされた情報を駆使しつつ海外の日本文化研究の動向を理解し、世界規模でリーダーシップのとれる人材である。

研究活動としては、歴史都市京都を中心とし、日本文化・芸術コンテンツを対象にデジタル・ヒューマニティーズに基づいて、人文科学研究のさらなる深化を図る。最先端の情報技術(アーカイブ、データベース、地理情報システム、Web2.0など)を最大限に活用して、有機的な日本文化・芸術コンテンツの公開・共有・活用を実践し、世界における日本文化・芸術の研究ポータルとしての役割をになう。新しいコンセプトの人材交流システムの構築と、研究コンテンツの世界規模での共有化を実現して、日本文化・芸術研究の世界的人材育成拠点の形成、グローバル・ハブとしての教育研究機能を歴史都市京都に形成することを目指すものである。

【拠点形成計画の概要】

(教育) COE研究の研究拠点であるアート・リサーチセンターを教育の受け入れ組織として改編し、恒常的な研究所とし、そこで研究プロジェクト参加型(体験型)教育システムの枠組を構築、研究科横断型かつ公開型、バイリンガルの教育プログラム(「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ教育プログラム」)を実施する。ここでは、データベースやアーカイブ、WEBなどを縦横に使いこなす研究者を育て、すでに基盤ができつつある海外の提携機関(大学・研究所・博物館グループ)での研究研修活動、国際学術会議などでの積極的な研究発表を促進する。また、テーマ公募型で博士課程院生や若手研究者(PD)を募り、プロジェクト型の研究活動ができる人材育成を推進する。さらに、海外の若手研究者の受け入れを積極的に進めるため、京都アメリカ大学コンソーシアムとの提携、東アジアの大学・日本学研究所との交換プログラムなどにより、教育グローバル・ハブ機能を形成し、後期課程院生・PDレベルの若手学生交流の組織化を行う。特に、総合大学である本学の特徴を生かし、学部・博士課程前期課程の教育システム(現代GPやJapan Studyなど)とも強力な連携を図り、一貫した教育体制のもと、計画的な博士号取得者輩出のためのプログラムを確立する。

(研究) 21世紀COEにより蓄積した有形・無形文化財のデジタルアーカイブを活用して人文科学研究の深化をさらに進め、デジタル・ヒューマニティーズに基づいて、世界レベルでの共有と活用・流通を推進する。デジタルアーカイブは、世界に分散・散在している文化・芸術コンテンツの統合を実現する。文書・画像・音声・動画・モーションなどの異なる分野のコンテンツを情報処理技術により融合化し、他機関のDBも含めた有機的な関連付けによって、研究資料の質・量両面での環境革命を起こし、それによる研究内容の質的高度化につなげ人文科学研究の新しい視座を与える。そして、地理情報システム(GIS)技術によって、異なる文化・芸術コンテンツの時・空間上でのコンテンツの可視化と重層化をさらに進める。また、Web2.0などの双方向型ネットワーク環境を基盤に、より効果的な情報の公開・共有・活用が行われる研究ポータルを実現する。特に本拠点のユニークなテーマとして、屏風の熟覧システム、板木の立体計測と分析、邦楽・芸能資料のDB化と分析、陶磁器の立体形状解析など、特にデジタルアーカイブ技術と人文科学研究の連携が効果的な対象を取上げ、具体的な成果を蓄積・発信する。また、歴史文化都市京都の特徴である、精緻・繊細な文化財のアーカイブ化技術、解析技術の開発研究も推進する。

(海外連携) 21世紀COEで確立した、海外の日本文化研究拠点・大学・研究所・博物館・美術館などとの強力な連携に基づき、国際的な共同研究、および、院生・若手研究者の国際的な実践的教育の場を形成する。また同時に、海外の優れた日本文化研究拠点を、ネットワーク環境を活用して有機的に連結するとともに、日本文化の中心的現場としての「京都」の魅力、在京都の芸術文化拠点との連携の魅力を生かした、デジタル・ヒューマニティーズに基づく、日本文化教育研究のグローバル・ハブを形成する。

機 関 名	立命館大学、ロンドン大学
拠点のプログラム名称	日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点
<p>〔採択理由〕</p> <p>日本文化の中心地の一つである京都という大学の地理的利点を活かし、これまでの21世紀COEプログラムの成果を基盤として、人文学とITを結びつける「デジタル・ヒューマニティーズ」の創成を目指す本プログラムは、世界に向けて日本文化を発信する教育研究拠点としての役割が大いに期待できる。また、大学の将来構想の中に明確に位置付けられており、今後の展開も期待できる。</p> <p>人材育成面においては、博士論文のテーマを設定し、国内外から大学院生を公募し、採用者に研究費、経済支援を実施する「プロジェクト型大学院生の公募」などを始め、充実した支援体制が計画されている。</p> <p>研究活動面においては、大英博物館を始め、21世紀COEプログラムの成果を踏まえた国際ネットワーク体制が構築されており、今後の飛躍的な成果の発信が期待できる。</p> <p>ただし、教育研究の両面において、「文理融合」の視点から、連携体制・指導体制の更なる工夫が望まれる。</p>	